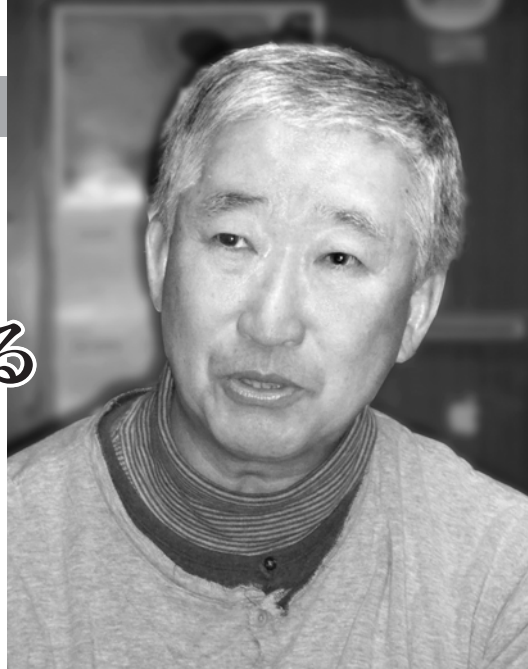


一つひとつの作業を おろそかにせず 完成度の高い楽器をつくる

岩本さんはマンドリンやアコースティック・ギターなどを中心に弦楽器を手づくりで製作しています。50歳を過ぎてから楽器製作者として本格的に仕事を始め、10年余りが経ちました。この間、さまざまな工夫と努力を重ね、客層を広げてきました。常に良い音を求め、完成度の高い楽器をつくり続けています。

● 楽器製作者 岩本 健さん

いわもと・たけし ●昭和24年、東京都生まれ。30年余りサラリーマンとして仕事を続け、52歳の時に楽器製作者として再出発を図る。マンドリンを手始めに、やがてアコースティック・ギターやウクレレ、バンジョーなどの製作を手掛けるようになり、仕事の幅を広げてきた。自身もマンドリンの奏者である。現在、楽器製作工房「アコースティックワールド」(<http://www.acousticworld.com/>)を主宰。



50歳を過ぎてから、楽器製作を仕事にしようと決心

——楽器製作のお仕事に就かれるまでのいきさつを教えてください。

岩本 一度転職をしているのですが、30年余りサラリーマンとして仕事をしてきました。しかし、転職した会社が倒産してしまい、新たな仕事を探さなくてはならなくなりました。私が52歳のときです。再就職のため、ある会社の面接を受けたのですが、うまくいきませんでした。そこで、以前から手掛けていた楽器づくりを本職にしようと考えたわけですね。

——楽器の演奏ならまだしも、それをつくるとなると敷居が高そうに思えるのですが…。

岩本 高校生のときから音楽が好きで、マンドリンを弾いていました。また、工作も結構好きでしたね。そういう意味では、自分の中に楽器づくりに携わる素地があったのかもしれない。

そもそもものきつかけは、アメリカで発行された楽器製作を解説した本に出会ったことです。その本を眺めているうちに、自分も楽器をつくりたいと考えるようになり、当時私は体を壊



パーツにノミを当て、形を整える。

して自宅で療養しており、時間はたっぷりありました。実際に楽器製作を始めると口コミで広がり、買ってくださいる方も現れるようになりました。その後もサラリーマンとして仕事をしながら、趣味と実益を兼ねて楽器製作を続けていました。

——それを生かして再出発されたわけですね。しかし楽器製作を仕事とし、それで生計を立てるとなると不安もあったのではないのでしょうか。

岩本 もちろんです。しかし、再就職するのは難しいという厳しい現実があります。それならいっそ好きなことを仕事にしようと決心したわけです。楽器づくりのための道具類は揃っていたので、新たな投資も必要ありません。妻は毎月生活するだけのお金を入れてくれれば何をやっても構わないと言っ

てくれました。

不安を抱えながらのスタートでしたが、うまくいかないときはどんな仕事でもやろうという覚悟はありましたね。

**客層を広げるために
さまざまな楽器をつくる**

——楽器は一度買ったら、長く使い続けるのが普通です。お客様は限られてしまつのではないのでしょうか。

岩本 できるだけ客層を広げようと、さまざまな楽器を製作するようにしています。当初はマンドリンの製作だけをしていたのですが、やがてアコースティック・ギターやウクレレ、バンジョーなども手掛けるようになりました。最近ではリゾネーター・ギター^(*)もつくっています。修理も引き受け、楽器の製作教室も開いています。スペースの問題もあつて教室では一度に一人しか教えることができません。効率化はよくありませんが、人に教えることで自分の仕事のやり方を整理できるというメリットがあります。

ほかにアメリカ力に行つて楽器店を訪ねるなど販路の開拓も試みています。ただし輸出にかかるさまざまな費用を考えると、単価の高い楽器でないと採算が取れないという問題があります。

——岩本さんがつくられる楽器の製作工程を教えてください。

岩本 まずは素材選びです。それぞ

*1 リゾネーター・ギター：アコースティック・ギターの一種で中央に金属製の共鳴板を付けたギター。

*2 響棒：弦の張力に耐えるよう楽器の強度を保つとともに、その振動を響板である表板に確実に伝えるための棒状の木片。

*3 フレット：弦を押さえる場所を示す線状の突起で、ネックの指板に打ち付けてある。



マンドリン製作に使われる各パーツと道具類。右下の道具は専用の鉋で特殊な形をしている。

れの楽器に応じた木材を選ばなければなりません。マンドリンやギターなら表板には、通常よく共鳴するスプルースを使います。裏板や側板には主にメイプルやローズウッド、ネック部分にはマホガニーを使います。インターネッ卜で、アメリカなど海外から取り寄せることもできます。しかし、必ずしも期待通りのものが送られてくるとは限りません。このため、一度に大量の注文はしないようにしています。

工程の第一段階は、楽器を構成するそれぞれのパーツに合わせ、おおよその形に木材を切ることです。表板は2枚の板を中央で張り合わせます。その後、ノミや専用の鉋で形を整えます。

側板は水に浸して加熱し、曲線をつけます。表板の裏側には響棒(※2)を接着します。ここまでできたら表板と側板、裏板を接着し、乾燥させたら加工したネックを付けます。そして塗装と研磨を繰り返し、最終段階でフレット(※3)をおおまかな工程は以上ですが、一つの楽器だけに掛り切るのではなく、さまざまな仕事を並行して進めています。

——お仕事ではどんなことを心掛けていらっしゃるのですか。

岩本 楽器にはいい音を出すことと同時に、耐久性も求められます。素材を厚くして頑丈にすれば耐久性は増えますが、それに偏り過ぎると音が損なわれます。楽器をつくる場合には、いい音と耐久性のバランスをどこに求めるかが大切です。一つひとつの作業を手を抜かず、丁寧に進めることは言うまでもありません。結局、それがいい楽器をつくることになるのです。

演奏者が満足してくだるんことが何よりうれしい

——どんなときにお仕事のやりがいや喜びを感じますか。

岩本 それは何と言っても私がつくった楽器を使って演奏している方が満足してくださることです。「これはいい」という言葉をいただいたときは、とても幸せな気分になります。

世界最高峰と言われるマンドリン奏者の一人にアメリカ人のサム・ブッシ

ユがいます。しばらく前に私のつくったマンドリンを彼に贈りました。彼がそのマンドリンで演奏しているのと知ったときは、とてもうれしく思いました。楽器製作者として、たいへん名誉なことです。

——お仕事の厳しさはどんなところにありますか。

岩本 楽器は消耗品ではないため、大量

に売れるものではありません。注文を受けたもの以外は売れるかどうかかわりません。また途切れなく仕事があるわけではないので、収入も不安定になりがちです。そんな中で、修理の仕事は確実な収入が見込めます。しかし修理に偏り過ぎると、楽器を使ってくださる方に喜んでいただくという製作者の醍醐味を味わうことができなくなってしまうのです。

——継続していかに仕事を確保するかは、常につきまとう問題です。この仕事を選んだ以上、それは仕方がないことですね。そうした問題を解消するために、人脈を広げようと、できるだけ人と会ったり展示会に作品を出品したりするなどしています。

作業中はどうしても前かがみの姿勢になるので、腰を痛めてしまう危険性



自作のマンドリンを手に取りながら微笑む岩本さん。楽器を使ってくださった方からお褒めの言葉をいただくことが「何よりうれしい」と語る。

があります。また腕を激しく動かすので腱鞘炎になるおそれもあります。そのため、同じ作業を長時間続けないように注意しています。

——若者を取り巻く就労環境は、厳しい状態が続いています。彼らに向けてメッセージをお願いします。

岩本 今の若い人は気の毒だと思います。経済状況も厳しく、大きな企業でもつぶれてしまう可能性もあります。

そんな中で若い人は今のうちから自分を磨いておくことを心掛けていただきたいと思います。たとえば、趣味であっても構わない。それがいざというときに役立つ可能性があります。まさに私の場合がそうでした。いざという場合に備え、スペシャリストとして自立できるだけの能力を身に付けておくことが大切ではないでしょうか。